

# Glocal Tenri



5

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.22 No.5 May 2021

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

## CONTENTS

- 巻頭言  
聖と俗の分離  
／永尾 教昭…………… 1
- 「おさしづ」語句の探求 (46)  
「おさしづ」第6巻における個人の身上・事情の  
伺いと「道」  
／澤井 治郎…………… 2
- 日本語教育と海外伝道 (34)  
国際化の中での日本語教育⑤  
／大内 泰夫…………… 3
- 台湾の社会と文化—天理教伝道史と災害民族誌  
(新連載)  
プロローグ  
／山西 弘朗…………… 4
- 宗教伝統における聖典の意味構造 (6)  
儒学テキストの素読とその意義  
／澤井 義次…………… 5
- 遺跡からのメッセージ (69)  
大和の文化遺産を学ぶ⑦—一社之内火葬墓の被葬  
者は誰か？  
／桑原 久男…………… 6
- イスラームから見た世界 (12)  
楽しく厳しいラマダーン (断食月) ③—祈りの  
夜とともに  
／澤井 真…………… 7
- 現代宗教と女性 (31)  
女性たちの保守運動との距離  
／金子 珠理…………… 8
- 天理参考館から (24)  
鯉織  
／幡鎌 真理…………… 9
- 2020年度公開教学講座要旨：『逸話篇』に学ぶ  
(6)  
第6講：103「間違いのないように」  
／堀内 みどり…………… 10
- おやさと研究所ニュース…………… 11  
新連載執筆のねらいと執筆者紹介／宗教  
社会学の会で研究発表／2020年度平和大  
学講座で基調発題／第13回宗教哲学会シ  
ンポジウムでパネリスト／ギリシア・アラ  
ビア・ラテン哲学会で研究発表／新刊紹介

## 巻頭言

### 聖と俗の分離

おやさと研究所長 永尾教昭 Noriaki Nagao

今少し、海外における天理教の本部拠点と教会のあり方について考察を続けたい。日本国内において、天理教の教会には教会長家族が住んでいる。そして「住み込み」という慣習がある。大きな寺院などと同様、若い信仰者などが言わば徒弟制度のように住み込み、日夜心身を鍛錬して信仰的成人を図っていくものだ。また信者家庭が共同生活している場合もある。

加えて、天理教独特と言えるかもしれないが、過去に犯罪などの複雑な事情を抱えた人が教会に住み込んで、教会の人たちと寝食を共にしつつ更生していくというケースが現在でもある。迎え入れる教会側は、彼らを言わば「拡大家族」として受け入れる。

この天理教の「住み込み」という制度<sup>(1)</sup>を、明治時代、国が問題にしたことがある。全財産を持参して教会で共同生活することが不謹慎として、当局の取り締まりの対象となった。それほど、これは救済活動として各地でかなり活発に行われていた。

例えば1933年、河上肇ら共産党の幹部が検挙されたとき、特高のスパイのように働いた百瀬幸夫は、共産党からの攻撃に身の危険を感じ、世間から姿を消すように静岡県<sup>(2)</sup>の天理教の教会に匿われている。

また、すでに述べたように天理教の多くの教会は一般民家程度の広さであり、神殿などの公的な部分と家族の居住部分が分かれていないことも多い。言い換えれば聖と俗が混在している。参拝場にちやぶ台が置かれ子供のランドセルが転がっている状況は決して珍しくない。

しかし、教会がそのような完全なパブリックな場所ではなく会長家族らの生活の場でもあることによって、所属信者と精神的にも濃厚な交流が可能になる面もある。参拝に来た信者が、茶果を喫して帰るといったことも間々ある。いま日本で

里親を務めている人の中に、天理教教会の関係者が多いことも周知の通りである(短所としては、教会が生活の場でもあるので初めての人が極めて入りにくいこともあるが)。聖と俗、言い換えれば公と私<sup>(1)</sup>が別れていないことについて、そもそも教会長などは世間から超然とした位置にいるのではなく、「俗にいて俗に墮せず」(『天理教教典』)という教えもある。

海外でも、この形を踏襲している。ただ、一般的に教会というものが生活臭のないパブリックなものである海外で、その状態で「教会」を称するのは現地の人たちには非常な違和感があるだろう。キリスト教の参拝場内に牧師の子供の玩具が転がっていたり、夕飯の匂いが漂っていたりしたら、それだけで参拝者は身を引いてしまう。しかし面積的に狭い天理教の一般教会が、公私を完全に分けることは現実的に不可能だ。

さらに言えば、ただでさえ多くの国では未だ日本人(日系人)が非日本人に布教しているのである。現地の人たちの違和感は一層増す。事実、筆者の天理教ヨーロッパ出張所(在フランス)在勤時、フランス人女性信者が約7年間住み込んだ。言わば「フランスの中の日本人コロニー」の中にいるフランス人という状況であり、様々な困難に直面した。

これらを考えると、ある程度の規模があり公的な性格も有する海外の本部拠点のあり方が重要になってくる。つまり、ここでは、可能な限り聖と俗のスペースを分けた方が良いのではないか。そしてその上で、住み込みを取ることを考えてみてはどうだろうか。

[註]

1. 「神道天理教会所中に教師信徒等移住共同生活を為せる者ありたるとの報告方の件」明治35年5月2日内務省宗務局国立公文書館蔵。
2. 立花隆『日本共産党の研究(二)』講談社文庫、1983年。

## 「おさしづ」第6巻における個人の身上・事情の伺いと「道」

『おさしづ改修版』第6巻(明治35～40年)における個人の身上・事情の伺いに現れる「道」の用例を整理する。第6巻には個人の身上・事情について伺われた「おさしづ」が94件ある。そのうち、「道」が用いられるのは57件、3回以上「道」が繰り返し用いられるのは24件である。伺われている身上や事情は、さまざまであるが、「道」の用例に注目して読むと、多くは同様のことを説かれているように見受けられる。ここでは、それぞれの個別の「おさしづ」の事情にはあまり立ち入らずに、「道」という言葉に込められた意味合いに着目して用例を整理したい。

## 道なら道のような事分けてこそ、道である

第6巻における個人の身上・事情の「おさしづ」のなかで、「道」という言葉が最も簡潔にして頻繁に繰り返し説かれているのは次の「おさしづ」である。

「道というもの、何分からいって道とは言えん。道なら道のような事分けてこそ、道である。」(さ37・9・26 仲田権吉 四十一才身上願)

この短い言葉を一読すれば、「道」の通り方について、強いメッセージが込められていることはすぐに感じられる。ここに言われていることが分からなければ、道を通っているとは言えない、と言われているような気がしてくる。その「道というもの」がどのようなものなのか、他の用例から理解を試みたい。

## 道という理から聞き分け

個人の身上や事情から伺われた「おさしづ」の場面では、往々にして、願ひ出る側は、どうであろうか、こうであろうかと思ひ悩んでいる場合が多いと思われる。

「さあ〜何故こうなる〜、又なあ〜と思ひやろう。思ひ心違ひで。人間心よく聞き分け。道という理から聞き分け。道というは通りよいもの、又通り難いもの。何よの心道の心治まりあれど、後々という。これどうもならん。」(さ35・9・18 増井幾太郎娘マスへ身上願)

ここに挙げた「おさしづ」はまさにそうした願ひ人に下された言葉である。そこでは心の治まりが問題にされ、「道という理から聞き分け」と言われている。よく似たような用例に次のようなものもある。

「皆多く立ち寄る理は道の理から成り立ったもの。何ぼ遠く所でも運ぶ理は、道の理から何でも無い事であろうまい。」(さ35・10・7 諸井政一身上九月二十九日一時迫り切り又それより日々と送れるに付分教会役員一同揃うて願)

「いかな事情も道の成り立ちから心の理、成り立ちの理聞き分け。」(さ37・11・27 増田亀次郎身上願)

人が遠くから運んでくるのも「道の理」から成り立ってきたものだとされ、また、現在のいかなる事情も、「道の成り立ち」から心の理を聞き分けるようにと諭される。

## 古き物調べてこうとするは、天の理の道

それでは、聞き分けるべき「道というもの」あるいは「道という理」とはどういうことであろうか。第6巻の個人の身上・事情の「おさしづ」を見る限り、「道」による論しでは、心を治めるために大きく二つのことが説かれている。一つはこれまでのこと、もう一つはこれから先に関することである。

「所々国々それぞれ、元という、これよく聞き分けてくれにやならん。又治まらにやならん。道の理この理治め。どうでも運んで事情万事の理に治め。万事の処に象と、何よの事どうであろうこうであろうと古き物調べてこうとするは、天の理の道であろう。」

(さ36・9・18 日本橋分教会長中台庄之助妻たけ出直し後、役員の前会長十年祭執行に付、増野正兵衛出張心得の願)

ここに言われるように、所々国々の教会や信者には、その元となつたものがある。たとえば、教会の礎を築いた先人であり、さらに遡れば、教祖のひながたが元にある。そうした「古き物調べて」今の心を治めて進むのが、「天の理の道」とであると説かれている。

次の「おさしづ」も、「古き物調べて」と言われるのと同様のことが説かれていると思われる。

「この道は三年五年のように思うて居る。世界を思うてみよ。この道は容易ならん処から付け掛けたる道、これを失わぬよう。……どう、あこまで心を合わせ頼もしい道を作りてくれ。あれでこそ真の道であると、世界に映さにやならん。」(さ35・9・6 永尾よしゑ身上願/押して、『親ありて子あり』と仰せ下さるは、本席の御身上に掛かります処をあちこちと掛かります処、身上御救け願ひます)

「この道」は3年とか5年とかで出来たものではない。容易ならん処から付け掛けた道であることを失わず、それに基づいて「頼もしい道」を作ってくれと説かれている。

## 道は末代

このように、古いこれまでの道を強調されるのは、これからの道のためである。

「よう聞き分け。この道は大抵で出けた道やない。これまで一日の日にとってどうなろうと思ひた日もある。この事思えばどんな事も楽しんで永く心持して急いではならん。……急いではならん。生まれ更わり、生まれ更わり〜まで聞き分けて楽しんでくれるなら、長く事である。長く理である。運んだ理のこうのうは、末代の理と思ひてくれ。」(さ36・2・11 畑林為七五十四才眼の障りに付願)

先長くというのは、人間の一生どころか、生まれかわりしてまで先、末代までの長い心になって、そうした先を楽しみに、着実な歩みをすすめるように言われる。このことは、ほかの身上伺いの「おさしづ」でも繰り返し説かれている。

「道は末代、理は末代、この理持つてくれ。いかなさしづも籠もりある。どんな事も、世上の理見てたんのう治めてくれるよう。」(前掲、さ35・10・7)

「道の理一代切りと思ひ。道は末代、人間は一代。安楽一つの理、日々と思ひ心間違ひて居る。一つ年限楽しんでくれ。又候こんな事と心を持つて、一代の理でない、末代道の理はころつと取り替え。」(前掲、さ37・11・27)

「さあ〜皆思ひ出して運べば道は万劫末代という理、よう聞き分け。道という道、事情一旦心に嵌まり切つたら、どんな事でも心に治めにやならん。治めば楽しみ、楽しめば未だ暫く、とも言う。」(さ39・3・28 南紀支教会長下村賢三郎 六十二才身上願)

このように、道は末代とも理は末代とも諭され、徹底して先永く楽しみ道を歩む心を治めるように説かれている。

以上、第6巻の個人の身上・事情の「おさしづ」における「道」の用例を確認してきた。そこでは、これまでの「道」を振り返り、容易でないなかに次第に「道」がついてきたことを思い、「今世一代だけでなく末代までも」という心を定めて、先を長く楽しみに通ることを繰り返し諭されている。

## 国際化の中での日本語教育 ⑤

## コロナだけにコロコロ変わる

2021年1月14日、「菅義偉首相は13日、コロナ禍にあって就任以来推進してきた入国緩和政策を全面停止することを打ち出した」というニュースが流れた。コロナ禍において海外との人の往来が減少している中でも、日本政府はこれまで、「研修生」や「実習生」という名目で、外国人労働者を多く受け入れてきた。今の日本の状況を考えると技能実習生がいなければ成り立たない産業もあると聞く。また多くの留学生もアルバイト生として働いている。しかし、国内のコロナ感染者急増もあり、入国緩和措置を2020年12月28日に原則として停止したばかりだった。感染拡大を防ぐには水際対策としてそうせざるを得ない状況なのはわかるが、研修名目といいながら実質は労働力として、外国人を受け入れているということを世に知らしめたようにも感じる。このことは、政府が迷走していると他人事のように思うのではなく、国民の皆が真剣に考えていかなければならない問題ではないだろうか。未曾有の事態に誰もがどう対処すればいいのかわからないことだらけだが、この新型コロナというのは見えにくかった社会の問題を浮き彫りにし、皆でより良き方向へ導くために与えられた試練でもあり、チャンスでもある。

## 日本社会はすでに外国人労働者で成り立っているのか

厚生労働省の『「外国人雇用状況」の届出状況まとめ(令和元年10月末現在)』によれば外国人労働者数は1,658,804人で、前年同期比で198,341人(13.6%)増加し、過去最高を更新している。その要因としては政府が推進している高度外国人材や留学生の受け入れが進んでいること、雇用情勢の改善が着実に進み、「永住者」や「日本人の配偶者」等の身分に基づく在留資格の人々の就労が進んでいること、技能実習制度の活用により技能実習生の受け入れが進んでいること等が背景にある。国籍別では、中国418,327人(全体の25.2%)ベトナム401,326人(同24.2%)フィリピン179,685人(同10.8%)が上位3位で、増加率が高いのが技能実習生である。産業別の割合でも「製造業」が20.4%、「卸売業、小売業」が17.4%、「宿泊業、飲食サービス業」が14.2%、「建設業」10.7%というようになっている。やはり日本社会の中ですでに多くの外国人が働いていて、日本社会を構成する一員となっていると言っても過言ではない。

## ある建設会社社長の話

Yahooニュースで、ドキュメンタリー「ベトナム人技能実習生を「幸せにする」一建設会社社長が掲げる「帰国後」の目標」(<https://creators.yahoo.co.jp/kishidahirokazu/0200089407>)を見た。10分くらいのビデオだが、これが技能実習の本来のあるべき姿なのかとも思った。話を要約すると、2016年に北海道千歳市にある建設会社の社長、山口健氏が、ベトナム人技能実習生の面接のためベトナム・ハノイ市の日本語学校を訪れた。建設業界全体で人手が不足し、求人を出してもなかなか集まらなくなっていた。山口社長は面接を振り返って、次のように述べている。「その時の僕は、立場が上になったような気持ちでいました。ところが、なんで日本に来たいのかと聞いたら、『自分の国だけど、ここにいても何も夢がない。お金がない。チャ

ンスをつかみたい』って。こんな軽い気持ちで面接をやっちゃダメだ、と罪悪感を持った。会社の苦境を助けてもらおう、でも来てもらうんだったら、そのぶん返さなきゃいけない。『絶対幸せにしてやるから心配すんな』と誓った。」

その後、実習生たちと信頼関係を築き、実習生もその建設会社で大きな戦力として活躍した。彼らは日本へ来るのに渡航費や手続きで50万円くらい借金を背負ってやってくる。山口社長は実習生の給与や待遇の改善ができないかと考え、外国人技能実習生の受入組織である監理団体の理事長に就任し、賃金や条件の見直しも行った。ビデオの中で山口社長が子供の頃に苦労した経験を振り返る場面があるが、そういった経験もあってベトナムの技能実習生たちの気持ちを汲み取ることもでき、いい関係を築こうと努力したのだと、筆者は思った。

## 安い労働力と考えるのではなく

日本の経済界は、外国人労働力の導入に積極的だが、その一方で、外国人労働力を多く受け入れ、日本が移民の多い国になることを懸念する人々もいる。しかし、少子高齢化に歯止めがかからず、自動車産業、製造業、あるいは伝統的地場産業など、労働力不足で、外国人労働者を受け入れなければならない現実がある。彼らを単なる安く使える「労働力」として考えるのではなく、日本の社会を構成する一員として尊重する社会を作っていけるか、すべての日本国民に問われているのではないだろうか。先に挙げた北海道の建設会社社長のドキュメンタリービデオを見れば技能実習生を単に労働力を補うだけの存在として扱うのではなく、人間的なつながりをもって共に努力していこうという姿勢が強く感じられる。技能実習生の失踪や事件なども時々ニュースに出ているが、受け入れている側にも問題があるケースもけっこう多いのではないかとも思える。

## 同じ人間である

筆者は「世界中、一列皆兄弟姉妹や、他人というはさらにないぞや」(おふでさき13号43 漢字は筆者)と教えられてきた。この天理教の原典である『おふでさき』の13号には人間社会のあり方について説いた歌が多い。筆者なりのこの一連の歌の解釈を書くことにする。人間というものは神の子であり、世界中皆が兄弟姉妹である。しかし人間はそのことを知らずに暮らして神は残念に思っている。人間が人間であるかぎり誰もが皆、同じ魂であり、その魂が神から体を借りて現世に生まれ、暮らしている。そのことを知らずに、人間には高低があるように思っているが、それは誤った考えである。そして、この真実を世界中へ知らせ承知させたい。そうすれば人々が争い、傷つけあうこともなく平和に暮らしていけるということである。これは真理であり、実践すれば陽気な素晴らしい暮らしができると保証しているようにも感じる。先のドキュメンタリービデオを見た時に真っ先に感じたのが、この教えである。先進国と言われる国から来る人も外国人である。開発途上にある国から来る人も外国人である。先に述べたように高低があるわけではない。分け隔てなく皆が同じ神の子で兄弟姉妹であるという思いで、皆が外国人問題を考えていかなければならないのではないだろうか。

## プロローグ

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 ジュニア・フェロー  
山西 弘朗 Hiroaki Yamanishi

## 人生には人生を大きく変えるような思いがけない出会いがある

筆者は2007年4月に香川大学法学部に入学し、はじめて初修外国語として「中国語」と出会った。しかし、この出会いはあまりにも突然で、思いがけないものであった。筆者はアメリカ留学についても、これと同じような経験をしている。中学時代に、自分が置かれている社会や環境が自分に合っていない感覚を日々抱くようになった。それに反抗期も重なり、アメリカ留学を希望するようになったが、筆者以外だれもこの希望が叶うなどと考えている人は周りにいなかっただろう。しつこく懇願する筆者に母は「おそらく不合格になるだろう」という気持ちで筆者がアメリカ留学の選考申請に応募することを許してくれた。筆者が応募申請した交換留学プログラムはアメリカ国務省が主催するもので、公立高校の学費やホームステイ先での生活費などの費用がほぼ無償であるため、応募者が多く、選考方法も英語試験に加え、日本語での面接、保護者同席での面接など厳しい内容だったので、そのように予想したのも当然である。しかし、選考に合格し、母の予測に反して、アメリカ留学は現実のものになった。

## アメリカ留学から大学進学へ

アメリカ留学は1年あまりであったが、派遣先のアイダホ州ボイシ市での経験は15歳の筆者には、それまでの価値観や生き方を大きく変えるものとなった。一番大きな変化は約30キロも増加した体重だったのだが、見えないものの変化の方が大きく、留学前に在学していた日本の高校に復学してから、いわゆる「逆カルチャーショック」を感じる事が度々あった。その中で、「自分らしい」生き方を模索するようになった。ちょうど高校2年生の2001年9月11日に、ニューヨークで同時多発テロ事件が発生し、まるで映画の1シーンのように世界貿易センタービルにぶつかっていく飛行機の映像を緊急ニュースで見ながら、これから世界がどうなるのだろうかとか大きな不安に襲われた。

筆者はアメリカ留学の経験で、自由と多様性の雰囲気溢れるアメリカにすっかり魅了されていたので、世界にこのようなアメリカを憎む人々がいることなど想像もしていなかった。そのような筆者にとって、このテロ事件の心理的衝撃は、同じ年代の日本の高校生よりもはるかに大きかった。しかもこの事件が発生する1カ月ほど前に筆者は留学先を再訪していた。

このテロ事件が発生し、アメリカはアフガニスタンへの報復攻撃、そしてイラク戦争へと進むのだが、この中で筆者も自ずと中東問題や国際政治について興味を抱くようになった。「将来、世界平和に貢献できるような国連の職員になりたい」、これが大学進学を控えていた筆者の希望として胸が膨らんでいった。

国連職員や進学する大学についていろいろと情報を収集する中で、法学部で「国際法」について学べる事が分かり、法学部で国際関係論などの国際政治についての講義もあることも分かった。そして、実家の徳島から一番近い法学部である香川大学の法学部に進学することになった。

## 中国語との出会い

大学に進学すれば英語以外に初修外国語を学ばなければいけないことはわかっていた。香川大学では当時、初修外国語として、

フランス語、ドイツ語、中国語、ロシア語の4つの外国語が選択できるようになっていた。国連職員を目指す筆者は迷わずフランス語を第1希望に選んだ。理由は国連などの国際会議で使用される言語は、英語が基本だが、その次に使用頻度が高いのがフランス語だからである。事前に、法学部の多くの学生は、日本の民法や刑法がドイツ法を継受していることからドイツ語を選択すると聞いていたので、フランス語なら受講希望者の多寡によって人数調整されても、問題なく受講できると思っていた。そのため第2希望以下どの外国語を選択したかも記憶にないほどであった。しかし、人生は突然で、思いがけない出会いと直面するものである。初修外国語の選考結果が貼られた掲示板を確認しようと自分の名前を探すと、名前の横の欄の「中国語」という記載が目飛び込んできた。筆者は自分の目を疑った。「これは事務的なミスだろう」と、教養科目の事務所に再確認に訪れた。「いいえ。ミスではありません。あなたの受講する初修外国語は中国語です」。けんもほろろに答える事務員に、「いや、法学部の学生のほとんどがドイツ語を選択するはずだから、第1希望にしているフランス語が受講できないなんておかしいです・・・」と食い下がったが、すぐさま「第1希望にフランス語を選んでいた法学部の学生のうち2人だけ抽選に漏れました」とさらに説明を加えてきた。このような顛末で、意気揚々と国連職員を夢見ていた大学1年生の筆者は入学した数日後、絶望の淵に突き落とされたのである。「人生ってこんなことがあるんだ……」と、筆者の心には「？」が絶え間なく湧き出してきた。そして、初修外国語の第1回目の講義で「Bonjour (ボンジュール)」から「你好 (ニーハオ)」の悲しい現実と直面することになった。筆者は中国語の講義を受けるたびに憂鬱な気持ちに苛まれた。

## 台湾との出会い

筆者はもともと勉強が好きではなかった。小学生の時は、宿題を自宅でやった記憶は一度もない。毎日、放課後教室に残されて宿題をしていた。勉強嫌いな筆者にとって、自宅でわざわざ嫌な学校の宿題などやりたくなかったのである。しかし、中学時代に勉強ができる友人と出会って、その友人に勉強を教えてもらうなかで、徐々に勉強が分かるようになっていった。高校時代のアメリカ留学の後、英語は何も予習をしなくても、ほぼ満点を取ることができるようになった。こうした変化の中で、「勉強は嫌いでも、悪い成績を取るのはもっと嫌」という人間になっていた筆者は、「中国語は嫌いでも、悪い成績を取るのはもっと嫌」という気持ちで、とりあえず、中国語の勉強を頑張るようになった。中国語は特に好きではなかったが、中国語を教えてくれる先生を好きになった。「ちょっと変わった先生」、これが筆者の先生についての印象だったが、講義の中で話してくれる内容がユニークでとても面白かった。先生は学生時代、落研に所属していたらしく、いつも扇子を胸ポケットに入れて講義をしていた。先生は中国文学を研究されているが、台湾人恩師との出会いから、台湾の近現代文学についての研究も進められており、台湾での楽しいエピソードを聞いていると、なんとなく催眠術にかかったように、未知の地「台湾」への興味が湧き上がってきたのである。

## 儒学テキストの素読とその意義

世界の宗教伝統のなかでも、ヒンドゥー教やイスラームなどの伝統的な「学校」では、聖典の言葉が長年にわたって、記憶によって世代を超えて伝承されてきた。その学びの場としての「学校」は、聖典の内容を深く理解するうえで重要な役割を担ってきた。そうした伝統的な宗教教育の場は、わが国の江戸時代における「寺子屋」のような教育組織であった。わが国では江戸時代、都市であれ村であれ、人びとの多くは「寺子屋」で文字の読み書きを学んだ。近世の学問は、儒学が基礎にあった。蘭学のテキストも、その多くが漢文であった。そのために、学問を志す人は何らかのかたちで儒学を学んだ。ここでは、江戸時代の伝統的な教育について、「語られる聖典」という聖典論の地平から、儒学テキストに焦点を当てることによって、儒学の古典テキストを素読することの意義を考察したい。学びの場としての「手習塾」(寺子屋)

一般になじみ深い「寺子屋」という言葉は、意外にも、江戸時代には広く用いられていたわけではなく、必ずしも統一された呼称はなかった。「寺子屋」の呼称は上方(関西)で用いられていた。上方には歴史の古い寺院が多くあり、中世には寺院が庶民への教育の場であった。「寺子屋」は一般には「手習塾」と呼ばれていた。「手習塾」とは、文字通り、子どもに手習いを教えるための塾を意味していた。明治に入って近代学校が普及する以前、わが国では、学びの場として手習塾や藩校があった。江戸時代の後期、全国的に都市でも村でも、すぐ近くに子どもが毎日歩いて通える手習塾があった。<sup>(1)</sup>

子どもたちはふつう7、8歳で手習師匠に入門した。入門には特に定まった時期はなかった。ただ習慣として、2月の初午の日に弟子入りすることが多かった。入塾はあくまでも塾の手習師匠の弟子になることを意味するもので、手習塾という教育組織に入学するという意味あいではなかった。そこでの学習は、子どもたちが手本にしたがって自ら手習い稽古するという具合に、自学自習が原則であった。<sup>(2)</sup>

### 儒学テキストの素読

すでに述べたように、江戸時代には、ただ単に「学問」と言えば儒学を意味していた。儒学は四書五経などのテキストを読むことに徹した学問であり、学ぶべき学問の最も正統的な位置におかれていた。それはあらゆる学問が立脚する基礎教養であった。子どもたちは「私塾」と呼ばれる学問塾において、四書五経によって代表される「<sup>けいしょ</sup>経書」という古典テキストを学んだ。四書五経とは、『大学』『中庸』『論語』『孟子』(併せて四書)および『易経』『書経』『詩経』『礼記』『春秋』(併せて五経)のことである。学問塾は師と弟子がともに学問するための、学問の場であった。経書という儒学テキストは漢文で書かれており、10歳ごろまでに儒学テキストの素読を終えることが求められた。

「素読」とは、たとえ儒学テキストの内容が理解できなくとも、声を出して繰り返し読み、そのままに暗誦することを意味した。たとえば、江戸時代の有名な儒者、貝原益軒(1630～1714)は子どもの教育を体系的に論じた著書『和俗童子訓』の中で、「本を読み、学問をする法は、年が若くて記憶の強い時、四書五経をつねに熟読し、回数を何べんも重ねて暗記し、音読するがよい。」また「四書を毎日百字ずつ百べん音読して、それで読んで、それで書くがよい。」(原漢文)と記している。<sup>(3)</sup>このように儒学テキストは、声を出して繰り返し正確に読み、心に憶え込むことが肝心で

あった。貝原益軒は子どもの教育に関する体系的な著書『和俗童子訓』をわが国で初めて出版したことから、わが国の「教育学の祖」とまで言われる。その著書の初版は宝永7年(1710)であったが、それ以後も版を重ねて読み継がれた。このことは当時も、人びとが子どもの教育に強い関心を抱いていたことを示唆している。<sup>(4)</sup>

江戸時代の教育は、原則的に個別指導であった。素読も本来、個別指導であった。子どもの前には、大判の木版刷りのテキストが置かれ、師匠はそのテキストをはさんで、子どもと差し向かいに座る。師匠がテキストの漢字を木製の棒で指し示しながら、声を出して読んでいく。それを子どもがおうむ返しに復唱する。子どもは師匠の指導がなくても読めるようになるまで、繰り返し音読する。素読では、子どもは師匠の読みを正確に模倣することに始まり、それを繰り返して完全に暗誦できるようになるまで習熟した。このように「聖人の教え」すなわち真理を蔵した「書かれた聖典」を日々、声に出して暗誦して、それをまさに「語られる聖典」として自分のものにしていった。こういう学びの方法は、たとえば、筆者が研究調査したことのあるインドのシャンカラ派僧院において、ブラフマチャーリン(学生)たちがヴェーダ聖典およびウパニシャッド聖典を習得するために、日々、実践している学習法と同じパターンを示している。このことは宗教学的に注目すべき事実であろう。

### 読書による儒学テキストの「身体化」

子どもたちは儒学テキストの文字を見て、心を集中して繰り返し口に唱える。そのことによって、そのテキストを自然に覚えていく。心や眼や口などの身体の器官を動員して「読書」をする。ここで言う「読書」とは、私たちがふつうイメージする読書とはちがって、素読による読書である。私たちはふだん読書をするとき、眼だけで黙読しているが、江戸時代における「読書」とは、眼だけで読む黙読とちがって音読であった。

素読による読書の意義について、江戸の教育に詳しい教育史学者の辻本雅史は、次のように言う。素読とは経書を「まるごとみずからのからだの内部に獲得し、〈身体化〉する過程」であり、いわゆる「からだで覚える」ことに相当する。テキストを暗誦する素読によって、その言葉の意味や解釈を与えなくとも、「義理に通じ」すなわち聖人の教える意味が理解できて、漢籍を自在に読みこなすことができるようになる。それは「音の響きや抑揚、リズムをともなって反復復誦することによって、いわばからだ全体が動員してなされる読書」である。<sup>(5)</sup>

素読によって〈身体化〉された儒学の知は、日々の生活の中で、実感的にその意味が理解できるようになる。その意味理解が日々の生き方の中で具体化されていく。儒学テキストの言葉だけの理解は、いまだ表層的な理解にすぎないが、経書の暗誦によって得た知識は心の深みへと次第に滲み込んでいく。こうしたプロセスを経て、「書かれた聖典」は素読による読書をとおして心に記憶され、次第に「語られる聖典」となっていくのである。

[註]

(1) 辻本雅史『「学び」の復権—模倣と習熟—』角川書店、1999年、18～21頁。

(2) 同上書、24～25頁。

(3) 貝原益軒(松田道雄訳)『和俗童子訓』(『貝原益軒』日本の名著14、中央公論社、1969年)、218～219頁。辻本雅史『「学び」の復権』、62頁。

(4) 辻本雅史編『教育の社会史』放送大学教育振興会、2008年、77頁。

(5) 辻本雅史『「学び」の復権』、70～73頁。

2019年にスタートした共同研究「大学キャンパスと文化遺産」は、コロナ禍に見舞われた2020年度も、おかげさまで活動を進めることができた。今年度のテーマは、「天理大学杣之内キャンパス周辺の文化遺産と歴史的環境を活かした地域づくり」というもので、今後、「なら歴史芸術文化村」(2022年春開設予定)の整備に伴って大きな変貌が予想される杣之内地区について、点在する文化遺産や恵まれた歴史的環境の価値を再認識するとともに、それを活用した持続可能な地域づくりの方向性を見いだすことを目的とした。とはいえ、春学期は、オンライン授業への対応に追われるなどで研究に着手できず、秋学期になり、ようやく定例の研究会を数回にわたって開催することができた。そのなかで私がとくに関心を持ったのは、杣之内火葬墓に関する日野宏氏(附属天理参考館)の報告だった。

杣之内火葬墓については、本連載でも取り上げたことがあり(2020年11月号)、昭和56年(1981年)、親里競技場の建設に際して発掘調査が行われ、唐代に愛好された海獣葡萄鏡の優品が出土したこと、奈良時代後期の高級官人・石上宅嗣卿を被葬者とする説があることなどを紹介した。しかし、当時、発掘調査に携わった日野氏によると、異なる可能性が考えられるという。問題の火葬墓は、園原町から幾坂池に向けて伸びる丘陵の尾根筋を少し外れた南斜面にあり、直径10.36m、深さ1.5mの半円形の掘り込みを行い、さらにその中央に1辺3.2m、深さ0.6mの方形の掘り込みを行っている。掘り込みは、砂質、粘質の土を5～8cmの厚さで交互に重ねる版築の方法で埋め戻されている。版築の完了後、1.3×1.4mの方形の墓壇が掘り込まれ、コウヤマキを削り抜いた木櫃(長さ67.9cm、幅約45cm)が納められた。木櫃からは火葬骨に交じって銀製の釵子(やかつこ)が出土した。木櫃の脇から出土した海獣葡萄鏡は、製作年代が8世紀前半～中葉と推定された。

日野氏によると、火葬墓の築造年代については、『続日本紀』養老5年(721年)10月13日、元明上皇が自らの葬送について、薄葬を徹底し、火葬したのは他所に改めることを禁じた詔が参考になる。神亀元年(724年)に没した小治田安萬侶の火葬墓(奈良市都祁甲岡町)は、3.5m程の方形の穴で火葬を行い、元明上皇の詔に従って、そのまま埋め戻した上に盛り土を行い、遺骨を納めた木櫃(蔵骨器)と墓誌を埋納している。これに対して、杣之内火葬墓は直径10.36mと規模が大きく、高松塚古墳と同様の堅固な版築が採用されていることから、元明上皇の詔以前の造墓とみられるというのだ。よって、火葬墓の被葬者は、奈良時代の後半に活躍した石上宅嗣卿ではなく、養老元年(717年)に没した、その祖父、石上麻呂だった可能性がある。石上麻呂といえば当時の左大臣。右大臣・藤原不比等と並んで、当時の政権を支えたビッグネームだ。

そこで、年度末も押し迫った3月29日、定例研究会(現地見学会)を開催し、現状を確認する運びとなった。杣之内火葬墓は、親里競技場の敷地奥に保存されているのだが、見学するためには管財課の許可が必要だ。見学の当日は、共同研究の関係者のみならず、2020年春に開設予定の「なら歴史芸術文化村」の担当者・学芸員を含め、10数名の参加者が、附属天理参考館の玄関前に

集合した。まず、天理市がリニューアルした西山古墳の説明板を確認し、地藏堂、都祁山口神社で区長さんの説明を受けたあと、国道を渡り、「なら歴史

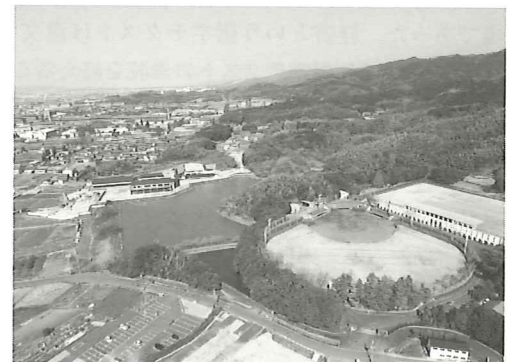


写真1 杣之内火葬墓の現地見学

芸術文化村」の工事現場を脇目に南に向かう。沿道の桜はすでに満開で、幾坂池の一本桜が少し離れて見える。西乗鞍古墳の手前の道路を東に折れると、天理市が整備した観光駐車場が右側にあり、さらに東に進んで、親里競技場の敷地内に入る。奥に進んで、普段は施錠されている通路の入り口を抜けて、グラウンドの背後に回り込んだところにあるのが、杣之内火葬墓だ。

火葬墓は発掘調査終了後に整備工事が行われ、墳丘が復元されている。火葬墓から南側の眺望は抜群で、グラウンドの向こう側に東乗鞍古墳、西乗鞍古墳が見え、さらにその背後に二上山と葛城の山並みがかすんで見える。墳丘上に設置された説明板には、「文化財としての重要性に鑑み、この地を永久に保存し、活用することを念ずる 天理教表統領 清水國雄」と記されている。文化財としての価値が高いのみならず、保存状態も素晴らしいことがわかる。競技場の建設に際して、文化財の保存・整備を行った当時の関係者の努力と判断に敬意を表したい。現状では未指定だが、いずれ、国や県レベルの史跡に指定されて然るべきであろう。指定の際には、火葬墓ではやや生々しい感じがするので、名称を「杣之内古墳」などに変更してはどうだろうか。

一つ気がつくのは、現状では、活用に関して少し残念な状況になっていることだ。現地を見学するためには競技場の敷地内を通っていくしかないが、整備工事中の「なら歴史芸術文化村」は、杣之内町火葬墓のすぐ北側の丘陵にあり、今後、互いに行き来ができるような散策路の設置を検討すべきだろう。遺憾ながら、スポーツ関連施設によって分断が生じてしまっているのだ。杣之内周辺地域については、「スポーツの町・天理」、「歴史と文化かおる共生都市・天理」(天理市第6次総合計画)が調和した持続可能な地域づくりが今後の課題であり、そのためには杣之内町、天理市、奈良県、学校法人天理大学、天理教などが認識を共有し、高いレベルで調整を行う必要があることが、杣之内火葬墓を一つの具体例として浮かび上がってくる。

写真2 上空から見た杣之内周辺地区  
(競技場の奥が杣之内火葬墓)

### 天理教の朝夕の礼拝

天理教教会本部で毎日勤められる朝勤と夕勤は、半月ごとに開始時刻が変化する。朝勤は日の出に、夕勤は日の入りに合わせて勤められるためである。4月後半の朝勤は午前6時、夕勤は午後6時30分から、そして4月前半の朝勤は午前5時45分、夕勤は午後6時45分から勤められる。

このように、半月ごとに刻々と開始時刻が変化するが、日中の時間が最も長い6月中は朝勤が午前5時、夕勤は午後7時30分からとなる。それに対して、日中の時間が最も短い12月中の朝勤が午前7時、夕勤が午後5時である。このことは、自然のサイクルを、天理教の信仰に取り入れて生活していることを示している。

### デジタル時代の断食月 (ラマダーン)

2021年のラマダーン月が4月13日の日没から始まった。2021年のラマダーンは、5月12日の日没を待って終了予定である。

イスラームの礼拝時刻は、日の出と日没を基準として、毎日微妙に変化する。たとえば断食初日の4月13日、奈良県天理市に在住するムスリム (イスラーム教徒) が日の出前の礼拝 (ファジュール fajr) を行おうとすると、時刻はちょうど午前4時からである。そして、礼拝の時刻は、翌14日に3時58分と毎日少しずつ時刻が早まっていく。それは、13日の天理市の日の出が5時28分、14日の日の出が5時26分と少しずつ早くなっていくからである。

断食に際して、ムスリムは日の出前の礼拝を告げるアザーン (礼拝の呼びかけ) が始まる前に、食事を済ませなければならない。4月13日の日没時刻が6時27分なので、12時間以上、彼らは飲食を行わずにいることになる。

筆者がこのように天理市の礼拝時刻を知ることができるのは、近年、目まぐるしく変化するデジタル革命のお陰である。現在、科学技術の発展に伴い、日本の各市町村における断食の開始時刻が1分単位で分かるようになっている。たとえば、Islamic Finder というインターネット・サイトでは、「Tenri, JP」 (日本・天理市) と表示され、天理市での礼拝時刻を1年を通して知ることができる<sup>(1)</sup>。また、スマートフォンでは、礼拝時刻を確認できる「アプリ」 (アプリケーション) が多数あり、GPSの位置情報と連動して現在地での礼拝時刻が瞬時に割り出される。さらに、アラーム機能と連動しており、礼拝時刻を知ることができるようになっている。

### 断食月の夜の祈り

筆者が知りうる限りであるが、ラマダーン月におけるムスリムたちの労働意欲は、それ以外の月に比べると少なからず落ちるように思われる。しかし、ムスリムたちの口から、断食が辛いという言葉聞いたことはなかった。それは、彼らがムスリムとしての信仰的義務を喜んで果たそうとしているからだろう。

日本では、ムスリムは1日5回礼拝すること、「ラマダーン」では、日中に飲食を断つが、日没後に飲食可能であることを知る人が少なくない。しかし、日没後の礼拝 (マグリブ Maghrib)

が終わって東の間、すぐに夜の礼拝 (イシャー 'Ishā') があること、そしてさらに「タラーウィーフ」 (tarāwīḥ) と呼ばれる数時間の礼拝があることを、どれくらいの人知っているだろうか。

タラーウィーフとは、ラマダーン月の夜に行われる任意の礼拝である。この礼拝がアラビア語で「休息」を意味するタラーウィーフと呼ばれる理由は、この礼拝が4ラカア (rak'ah 複数形はラカアート rak'āt) ごとに一定の休息を取ることに由来する。ラカアとは、礼拝における一連の動作を指す。この礼拝は、ムスリムの義務ではないことが知られている。このことについて、ブハーリーが収録したハディース (預言者ムハンマドの言行録) では、次のように述べられている。

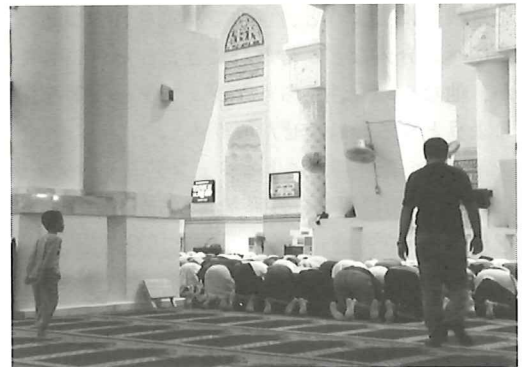
ラマダーン月に義務以上の礼拝を行うことは信仰の行為の一つ

(一) アブー・フライラによると、神の使徒は「信仰し、来世の報いを望んでラマダーン月に礼拝を行う者は、過去に犯した罪を赦される」と言った<sup>(2)</sup>。

タラーウィーフは、夜の礼拝直後に自宅やモスクで行われる。どれくらいの回数の礼拝を行なうかについては諸説あり、8ラカアとも20ラカアとも言われている。

### 祈りの1ヵ月

筆者が、マレーシアに滞在していたときのことである。断食月の初日、日没前に友人のアフマドと一緒に夕飯を買いに行った。夕食



を食べた後で (マレーシア国際イスラーム大学内のモスク、2011年) 過ごすのかと彼に聞いたところ、彼は大学中央に位置するモスクで行われるタラーウィーフへ行くことと答えた。せっかくなので、筆者も彼に同伴してモスクに付いていった。アフマドは、7時半頃に日没の礼拝をすませた後、断食明けの食事を取り、8時半過ぎにはモスクに向かって出発すると言う。

タラーウィーフの礼拝は夜の礼拝直後に始まる。筆者はモスク後方から礼拝の様子を眺めていたのだが、礼拝はなかなか終わらない。一度、9ラカアを終えて多くの人が退席したが、アフマドは最後まで残って礼拝していた。結局9時過ぎから始まったタラーウィーフが2時間続き、彼が筆者のところに戻ってきたのは、11時頃だった。彼の充実した顔がとても印象に残っている。筆者はその後、もう一度だけ彼に付いていった。彼は、ほとんど毎日タラーウィーフに参加していたようである。

[註]

(1) Islamic Finder (<https://www.islamicfinder.org/>) 2021年4月6日アクセス。

(2) ブハーリー『ハディース イスラーム伝承集成』(上)、中央公論社、1993年、31頁。

## 女性たちの保守運動との距離

宗教において女性差別が様々な形で見られる。その中で、なお女性たちが信仰を保ち続けているのはなぜだろうか。そのような女性差別的な要素を持つ、あるいは男性中心的な教団に、女性たちはなぜ留まり続けているのだろうか。このアポリアを解くために、近年の女性たちの「保守運動」を比較材料として参照してみよう。それらの保守運動は、一部の宗教とも担い手が重なり合うからである(鈴木2019)。

### 男女共同参画バックラッシュ

ところで、男女共同参画社会基本法では、1999年の成立当初より、女性の人権尊重というよりは、女性を日本の経済発展のためのコマとみなす新自由主義や少子化対策の意図が先行していたように思われる。そこでは、性別役割分担、女性の貧困や格差、DV、リプロダクティブヘルス・ライツ、といった重要な問題が二の次とされている印象が拭えず、したがってフェミニストといえども、同法に諸手を挙げて賛同しているわけではない。しかし同法やそれに基づく男女共同参画基本計画といった、ジェンダー平等に関するナショナル・マシーナリー(国内本部機構)は、全くないよりは不完全ながらもあった方がよいだろう。

一方、女性たちによる「保守運動」の矛先は、この男女共同参画社会基本法にも向けられた。そして同法の成立後も、それを骨抜きにしようと、各地で制定されつつあった男女共同参画条例への介入などが行われてきた。それにしても、男性ばかりか、他ならぬ女性たちもがジェンダー平等を掲げる同法を阻止しようとするのはなぜだろうか。

草の根の保守運動によるジェンダー・バックラッシュについては、すでに山口智美らの研究があるが(山口2012)、鈴木彩加は、近年の「保守運動」の中の、特に「主婦」や「女性」という主体に焦点をあて、質的分析を試みている(鈴木2019)。鈴木は考察範囲は、いわゆる「慰安婦」問題にも及ぶが、ここでは主婦による男女共同参画に対するバックラッシュのみ扱うこととする。

鈴木によれば、主婦が男女共同参画反対運動に参加することについて、先行研究ではおおよそ次の3つのモデルによって説明がなされてきたという。(1)伝統的保守主義モデル、(2)既得権益損失モデル、(3)新しい保守主義モデルである。

(1)では、日本会議などに典型的に見られるような、戦前の家族主義的国家観にもつながる、性別役割にもとづいた家父長制型家族が理想とされる。(2)では、性別役割分業を基盤とした社会構造のもとで、家事・育児・介護などのケア責任を女性に一義的に割り当てることから利益を得ている人々が想定されている。(3)は、「不安」によってバックラッシュへ接続していくというモデルである。長期不況による雇用の不安定化や新自由主義政策の推進による社会保障の切り捨てなどに起因する不安から目をそらすために、男女共同参画やフェミニズムを仮想敵にしているというわけである。

主婦による男女共同参画バックラッシュを説明する際には、(3)の新しい保守主義モデルが使用されることが多いという。既婚女性の多くが働くようになり、それまでの専業主婦としてのアイデンティティが傷つけられることに対する不安感や反感がそこには働いているとされる。しかし、漠然とした不安が、草の根のグループを立ち上げ、中・長期的に運動を継続してい

く原動力となり得るのかどうかと、鈴木は疑問を呈している。(1)と(2)についても、なお説明しきれない部分が残るという。

### 主婦バックラッシュと主流派バックラッシュ

そこで鈴木は、バックラッシュを担った保守系雑誌と反対運動に連なった保守運動団体の機関紙・会報・ミニコミの記事分析を通して、主婦たちの問題意識の解明を試みる。鈴木はその際、執筆者が「主婦」であることを自称している記事を「主婦バックラッシュ」と呼び、それ以外の記事を「主流派バックラッシュ」と呼び分けている。両者にとって「家族」が重要なキーワードとなっているが、家族の価値をめぐっては類似点とともに相違点が認められるという。

「主流派バックラッシュ」において「家族の絆」が強調される場合、家族は社会や国家の基盤として位置づけられている。基盤としての家族を解体する(かに見える)男女共同参画(や夫婦別姓)に彼らが反対するときも、主眼は家族の価値そのものの保持にではなく、あくまでも社会体制や国家秩序に置かれていると、鈴木は指摘する。

一方、「主婦バックラッシュ」は、具体的な家庭内での体験談という形をとり、非政治性が特徴となっている。そこでは、男女共同参画によって女性の社会進出と経済的自立が促されれば、愛情で結ばれ、支え合い助け合う家族の結びつきが弱まるとされ、家庭内の人間関係に対する脅威として男女共同参画が語られる。そして女性たちが家事・育児・介護を通して築き上げてきた、お互いを配慮しあう人間関係を維持することが一義的に重視されている。こうしてみると、社会や国家を論じるために家族に焦点化して男女共同参画を批判する主流派とは、力点の置かれ方が随分と異なることが窺える。

主流派の最終目標は基本法の廃止であるが、主婦たちが強く訴える、これまで行ってきた家事・育児・介護といったケアの意義と価値の社会的承認は、基本法の廃止だけでは達成し得ないものとなる。主流派における主婦像は「お気楽な身分」といったものであり、主婦の苦勞の内実は見過ごされている。したがって、両者の見解の相違は決定的であり、それは男女共同参画を批判するために持ち出されているはずの「家族の価値」という主張を瓦解させるほどの重要性を内包していると、鈴木は述べる。両者ともに、性別役割に基づく家族を推奨するが、それは表面的な共通点に過ぎないようである。

そもそもフェミニズムは、ケア領域そのものの意義と価値を認めている。しかし、その価値ある労働を「なぜ女性が主として行い、それへの待遇が劣悪(あるいは無償)なのか」を主題化してきたといえよう。主婦バックラッシュは、性別役割を肯定している点ではフェミニズムと袂を分かつが、鈴木も言及しているように、ケア領域の承認要請という点では、意外にもフェミニズムと近い距離にある。だとすれば、宗教に留まり続ける女性にもフェミニズムとの何らかの接点があるはずだ。一方で、宗教側にも女性たちの承認欲求に応え得るような教えの体系が用意されているものと推測される。

### [参考文献]

鈴木彩加『女性たちの保守運動』人文書院、2019年。

山口智美・斉藤正美・荻上チキ『社会運動の戸惑い』勁草書房、2012年。



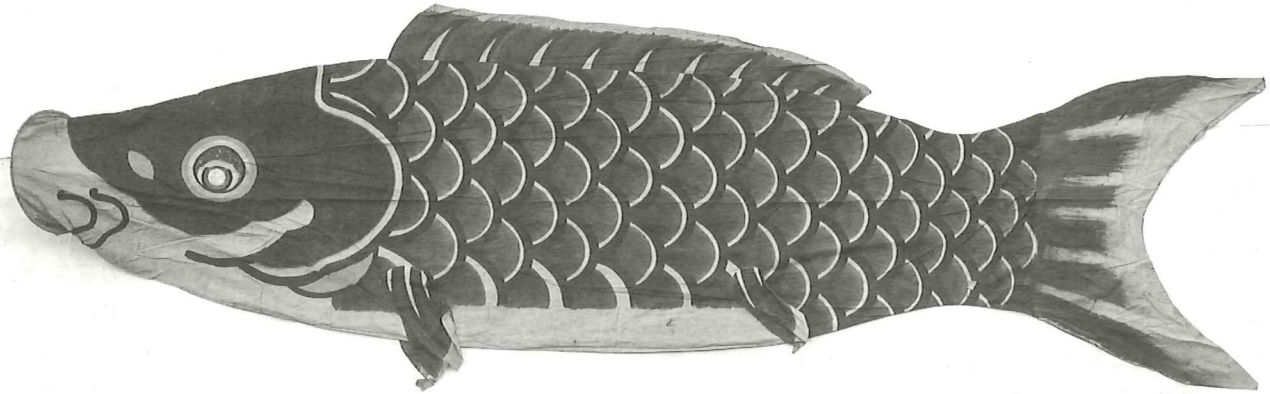


図1 鯉幟 奈良 昭和初期 全長 430cm (天理参考館蔵品)

いらか  
 麓の波と雲の波  
 重なる波の中空を  
 橋かをる朝風に  
 高く泳ぐや 鯉のぼり

(尋常小学唱歌 第五学年用『鯉のぼり』)

風薫る爽やかな5月にまことに似つかわしい歌である。麓は屋根瓦のこと、蒼い5月の空を大海原に見立て、白い雲と陽光に反射する家々の麓を白波になぞらえて、そこに鯉のぼりを泳がせる雄大で清々しい風景が目浮かぶ。5月5日が国民の祝日に制定されて、すでに70余年が経った。その制定の大きな理由は、この日が古来「端午の節句」として広く親しまれてきたことに由来する。5月5日、端午の節句といえ、武者人形、粽や柏餅、菖蒲、そして何と言っても鯉幟だろう。

日本は男うれしき幟かな

せいせい  
 松瀬青々

正岡子規から「大阪に青々あり」と賞賛され、明治期に関西俳壇で活躍した松瀬青々が詠んだ一句である。鯉幟は、もともとは幟の「添え物」で、いわばストラップのようなものであった。招きの小旗の代わりに付けた小さな鯉が、人気を得てやがて巣立って巨大化した。成り立ちから既に出世魚である。元来、幟は神の降臨を願う目印だが、武家の旗指物にも通じる。軍陣を模して打ち立てる五月幟は、まさに「男子ここにあり、神のご加護を願わん」という宣言だろう。新たに男児が誕生し、初節句を迎えた家が立てる幟は特に「初幟」と称した。

今年又おと子うみけん幟数

しょうは  
 黒柳召波

召波は京都の商人。与謝蕪村の門人となり、向井去来を崇拜した江戸時代中期の俳人である。

京都でも幟は誇らしくはためいていただろうが、鯉幟は

江戸の産物で、泥絵具と手描きによる彩色は凧絵師が手がけた。間近で見ると強烈な原色の色調も、空高く上げると青空と富士山を背景によく映えたらしい。一方、上方の鯉幟は墨の濃淡を基調とした上品な趣のものが多く、東西の好みの違いが窺えて興味深い。

図1は真鯉で、緋鯉と一対だが、モノクロ写真では全く同じに見えるので緋鯉は省略した。吹き流し、真鯉、緋鯉をセットにする形式は昭和以降のこととみられ、子どものような青色の鯉が加わった現代の3点セットは戦後になってからで、さらに緑色や橙色などの鯉も現れるのは昭和30年代以降である。

江戸っ子の趣味に合致した鯉幟は巨大化し、幕末の錦絵に描かれるように悠々と空を泳いだ。しかし、武家はこれを一切立てなかったという。武家は幟、鯉幟は町民のシンボルで、身分社会がここにも厳然と投影される。ちなみに公家は幟も鯉幟も立てない。だからこそ、黄河の急流にある竜門という滝を、魚のなかで唯一登り切った鯉が竜に変化した故事に因んで、生まれた男児の立身出世を願って庶民は鯉幟を立てるのであろう。5月の空に泳ぐ、神の招ぎ代でもある鯉幟に、現在の悪疫退散を願わん。



図2 大人8名で同様の鯉幟を持ちあげたところ。巨大さを実感していただきたい。於：参考館前庭

## 第6講：103 「間違いのないように」

おやさと研究所主任  
堀内みどり Midor Horiuchi

明治十五年七月、大阪在住の小松駒吉は、導いてもらった泉田藤吉に連れられて、お礼詣りに、初めておぢへ帰らせて頂いた。コレラの身上をお救い頂いて入信してから、間もない頃である。

教祖にお目通りさせて頂くと、教祖は、お手ずからお守りを下され、つづいて、次の如く有難いお言葉を下された。

「大阪のような繁華な所から、よう、このような草深い所へ来られた。年は十八、未だ若い。間違いのないように通りなさい。間違いさえなければ、末は何程結構になるや知れないで。」

と。駒吉は、このお言葉を自分の一生の守り言葉として、しっかり守って通ったのである。

## 泉田藤吉と小松駒吉

泉田藤吉は、大阪の天理教を語る時には欠かせない布教者である。以前、早田一郎氏は本誌150号で「河内から大阪に伸びた伝道線に天恵組という講があり、そこに泉田藤吉がいた。西国巡礼の強力ごうりきなどをしていたが、胃がんを助けられ入信。かしまの・かりものの教理に感動しておたすけに奔走した。泉田の伝道は猛烈で蒸し芋屋をしながら、病人と聞くと屋台を道ばたに寄せおたすけに走った。泉田から教えを受けた人に、茨木基敬（北大教会初代）、小松駒吉（御津大教会初代）、中西金次郎（大江大教会初代）、寺田半兵衛（網島分教会初代）などがある。」と述べ、高野友治氏は「明治20年頃の大阪の信者の約半分くらいは泉田氏とかかわりのある人ではなかったか。」（高野友治『天理教伝道史（大和・河内・大阪・和泉篇）——調査資料として』道友社、昭和29年）と言う。

小松駒吉は、慶応元年生まれ、明治15年、泉田のおたすけで入信。翌年には、天恵四番から別れて、天恵五番の講名を頂戴し、おたすけに奔走。大工をしていたので、「大工の講元さん」とも呼ばれていた。明治20年陰暦正月7日、教祖より赤衣を、12月4日には本席より「おさづけの理」を拝戴した。明治24年11月、御津支教会初代会長に就任。大正12年本部准員、昭和8年11月本部員となり、昭和9年2月70歳で出直した。

高野氏は、逸話篇に収められた逸話について次のように伝えている。教祖に「いくつになられました」と尋ねられた駒吉が「18歳でございます」と答えると、「若いなあ、若いなあ、若いなあ」「つつしみなされや」と言われた（高野、前書）。そして、「生神様の御前に参じ、その上親しくお言葉をかけていただいたので、呆然としていたそうです。すると取次人の山沢良治郎が、別室へ下がってから、『あんた、今、教祖から“慎みなはれや”といわれたが、慎みとは何のことや知ってますか」とたずねたそうです。『いいえ、分かりません』『慎みというのはな、身の行いをつつしむことです』と教えてくれたそうです。（高野友治『先人素描』天理教道友社、昭和54年）。若い駒吉が、「慎みなはれや」（「間違いのないように」）といわれ、戸惑っていたことが伝わってくる。

このことについては、小松初郎氏は「この教祖のお言葉には、さらに深い神意があったのではないかと思えてならない。その理由の一つが、駒吉の人柄にある。」（小松初郎『謹厳実直に歩んだ生涯』道友社編『“逸話のこころ”をたずねて—現代に生きる教祖のおしえ』道友社、2013年）と述べる。

## 小松駒吉の人柄

高野氏は「謹厳実直の方であった」と述べ、「教理は実に微に入ったもので、借物貨物、十柱の神様の表守護裏守護と、それは大し

たものでした」という上原さとの語りを伝えている。また、小松氏は、「大工職人の駒吉は字を知らなかったが、お道を学ぶため、新聞活字を手本に字を覚えるほど真面目な性格であった。直筆の覚書には、活字をそのまま写したような几帳面な字が並んでいる。」と述べ、次のようなエピソードを語っている。後年、大阪教務支庁の会計を任された駒吉は、一人ひとりの弁当代まで細かく帳簿に付けていた。府の役人が帳簿を調べにやって来た時、駒吉が雑費まですべて見せたので、「今日ご馳走になったお茶も、私の名前と一緒に値段が付くのやな。こんな堅い人なら安心や」と笑いながら帰ったという。また、（大阪でも警察の弾圧が厳しくなっていた頃）勾留当初は食事も喉を通らなかった駒吉だが、教祖の御苦労を思うと心が勇み、いつ警察に勾引されてもいいように、パッチや足袋を重ねて履き、おつとめを勤めていたという。

一方では、泉田の講社から離れ、自分の講社を持って布教に励み、幾人もの信者ができてきたが、後に別に講社を作り、また他に部属した信者もあった。明治21年2月6日「小松駒吉講社大いにいづむに付願」の「おさしづ」では、「多くの根もちゃんと埋りてある。匂がある。匂が無ければ、芽も吹かん、と、めんへの心では何でこうであろう—と思うやろう。……誠の精神なら、埋りて置く根があれば芽が吹く。」と論ぜられている。

この辺りの事情については、小松初郎氏は、「明治20年陰暦正月26日、教祖が現身をかくされた際には、その神意を理解できない信者が、駒吉の講社から離れていった。その上、警察の干渉も一層激しさを増したため、駒吉一人が信仰するような事態になった。一時は不足の心を募らせたが、本席・飯降伊蔵を通して『おさしづ』を頂き、…翌日、おさづけの理を拝戴した駒吉は、以後、生涯にわたって腹を立てない誓いを立てたという」（小松、前掲書）。駒吉の真面目すぎるほどの人柄が理解される。それゆえに、教祖は、駒吉に「駒吉の将来を見越した上で、世上のさまざまに欲に流されることなく、本人の徳分や性分に見合う道を歩ませようと、『間違いのないように』と仰せになったのだと思えてならない」（小松、前書）と、語っている。

## 若い人のために：「間違いのない通り方」

晩年、駒吉は日常の些細なことでも「ありがたい、もったいない」と心から喜び、大教会の信者にも、口癖のように「結構やで、喜びなされや」と話したという。駒吉自身の教話には、自らが病に倒れた時を例に「私たちは、忘れてはならないことで忘れてしまっていることが、随分ございます。例えば、水や空気のありがたさ、また、身の内のご守護のこと。忘れてしまいが人間の常ですから、どうか、私の身上の時のようなことのないよう、お働き下さいますことをお祈りいたします。」（小松駒吉「わかりすぎて、わからないこと」『続本部員教話抄 天理教教理のエッセンス』天理教道友社、1997年）と語っている。

上田嘉世氏は、「間違いのないように通る」ためには、判断に迷ったなら「間違いのない地図」である教祖のひながたという地図をしっかりと見ることが大切（上田嘉世「おやさまと若者—現代を生きる君へ 第1回 間違いのないように」『Happist』2012年4月号）であると述べる。間違いのない通り方とは、教祖に常に立ち返り、それを人生航路の「地図」として歩むこと、日々の守護を喜び忘れないこと、日々常々に互いに「結構」という方向へ向かって前進していくこととなる。

**新連載執筆のねらいと執筆者紹介****「台湾の社会と文化—天理教伝道史と災害民族誌」**

山西 弘朗

この度の連載テーマは「台湾の社会と文化」、副題は「天理教伝道史と災害民族誌」である。この副題からわかるように本連載は大きな共通テーマを「台湾の社会と文化」とし、具体的には二つの小テーマに分かれている。副題の前者は筆者が2011年に国立政治大学に提出した修士論文「台湾における天理教の信仰形態の変容」（原文は中国語）、副題の后者は東京外国語大学に提出予定の博士論文「台湾先住民村落における災害に関する文化人類学的研究」に基づいている。この連載をとおして、台湾の社会と文化の多様性や複雑性を、その歴史的背景や文化的・民族的背景からミクロとマクロの視点で複眼的に分析することで、これまで一般の日本人には見えにくかった現代台湾社会の動態をリアルに描き出したいと考えている。

**山西 弘朗（やまにし ひろあき）**

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所ジュニア・フェロー。1983年徳島県生まれ。香川大学法学部を卒業後、台湾政府（教育省）奨学金を得て国立政治大学社会科学院（民族学）修士課程へ進学。東京外国語大学大学院博士後期課程単位取得満期退学。専門は文化人類学、宗教研究。

**宗教社会学の会で研究発表**

金子 昭

3月6日、宗教社会学の会の2021年第1回研究会が、オンライン形式（Zoom）で開かれた。今回の発表者は2名で、金子が「コロナ疫災と新宗教教団—とくに天理教団の対応とその言説について」、櫻井義秀・北海道大学教授が「創価学会の初期北海道布教—小樽問答と夕張炭労事件をめぐって」というテーマで発表。それぞれ45分の発表に加え、45分の討議が行われた。

私は、宗教教団/教団宗教としてのコロナ禍への向き合い方の事例研究として、天理教がこの1年間、新型コロナウイルスの感染拡大の状況に対してどのように対応してきたか、教団の代表者・有識者、また公的機関紙（誌）に取り上げられた信者の言説について取り上げた。この研究会はふだんは関西圏の参加者が多いが、今回オンライン開催になり、日本各地や海外からも参加があった。

**2020年度平和大学講座で基調発表**

堀内 みどり

3月9日、WCRP（世界宗教者平和会議）日本委員会の2020年度平和大学講座がオンラインで開催され、堀内が基調発表を行った。昨年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響で中止になったが、その講座が繰り越された形で開催された。テーマは、「つながりあう“いのち”とその未来のために—女性宗教者に

期待するもの—」。2019年8月、「慈しみの実践：共通の未来のために—つながりあういのち」をテーマに開催されたWCRPの第10回世界大会の趣旨を受け継ぐもので、堀内は、こうした会議での女性宗教者がその存在を目に見える形にし、そうした機会が、女性に活動の場を提供・広げていくこと、また「ケア」のはたらきをより多くの場面で展開させていくに繋がってきていることを述べた。

最後に天理教の「十全の守護」に言及し、人は誰でも「きょうだい」として慈しみあっていると主張した。休憩を挟み、松井ケティ WCRP 日本委員会平和研究所所員・清泉女子大学教授、山本俊正 WCRP 日本委員会理事、河田尚子 WCRP 日本委員会女性部会事務局長がパネリストとして、それぞれ発題。その後、発題者4名と参加者によるパネルディスカッション・質疑応答となった。

**第13回宗教哲学学会シンポジウムでパネリスト**

澤井 義次

3月27日午後、第13回宗教哲学学会学術大会（オンライン開催）のシンポジウム「イスラーム思想と井筒「東洋哲学」」において、シンポジウムの趣旨説明および提題「井筒俊彦と「東洋哲学」構想」をおこなった。このシンポジウムは当初、昨年3月、京都大学で開催される予定であったが、新型コロナウイルスの感染拡大のために延期されていた。

このシンポジウムは、東洋思想・イスラーム哲学の世界的な碩学、井筒俊彦のイスラーム思想をめぐって、井筒哲学の特徴を明らかにするために企画されたものである。澤井による提題のほか、鎌田繁・東京大学名誉教授が「イスラーム思想と井筒俊彦」、東長靖・京都大学教授が「スーフィズム研究と井筒俊彦」と題して提題をおこなった。その後、小田淑子・元関西大学教授のコメントをふまえ、オンラインによる有意義な共同討議がなされた。

**ギリシア・アラビア・ラテン哲学学会で研究発表**

澤井 真

3月27日と28日、オンライン（Zoom）形式で開催されたギリシア・アラビア・ラテン哲学学会第5回研究発表会に参加し、「イブン・アラビーの存在流出論における現代的展開」と題して、27日に研究発表を行った。イスラーム神秘主義者であるイブン・アラビーの存在流出や人間の理想的な在り方を論じた完全人間論が、今日のイスラームにおける人間理解に影響を与えていること、そしてジェンダーに関わるイスラーム言説のなかで男性と女性の平等についての議論に用いられていることを考察した。

2日間で合計8発表があり、すべてが大学院生を含む若手研究者によるものであった。そのため、最新の研究成果について情報を共有しながら、活発な討論が行われた。イスラームについての研究発表がこれほどまとまって行われる機会は、日本国内ではほとんどなかった。ユダヤ教やキリスト教を専門とする研究者にとっても、それぞれの思想的な特徴がより明らかとなる点でも新鮮だという感想も聞かれた。

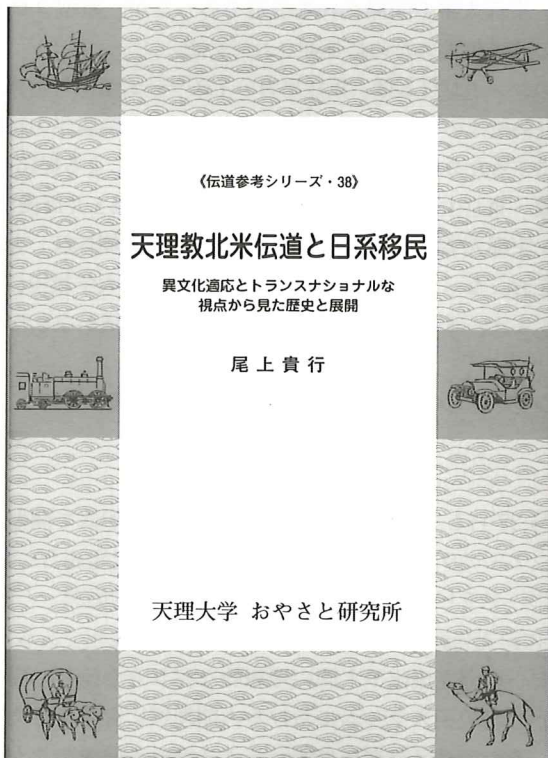
# 新刊紹介

令和2年度の出版として、おやさと研究所では、『おやさと研究所年報』第27号、『Tenri Journal of Religion』No.49、伝道参考シリーズ(38)を発行しました。

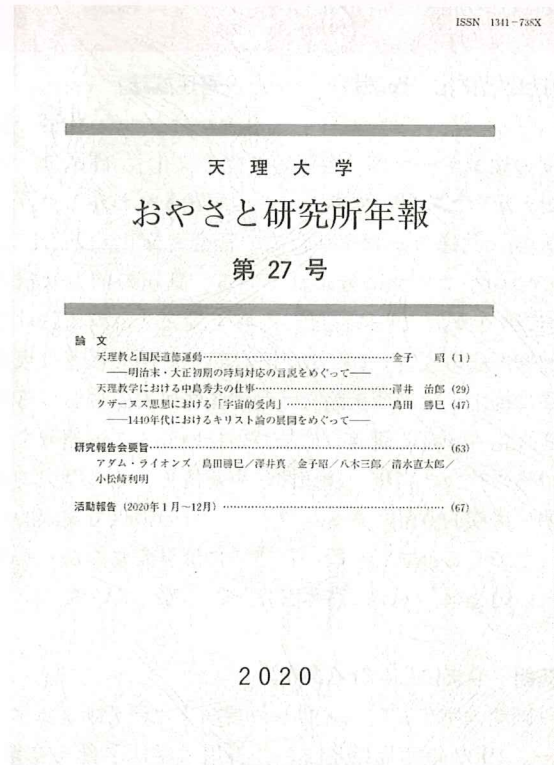
内容の詳細に関しては研究所のホームページ(<https://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/index.html>)をご覧ください。

伝道参考シリーズは、道友社販売所で購入いただけます。『Tenri Journal of Religion』は、研究所ホームページよりご覧いただけます。『おやさと研究所年報』は、メール(oyaken@sta.tenri-u.ac.jp)にてお問い合わせください。

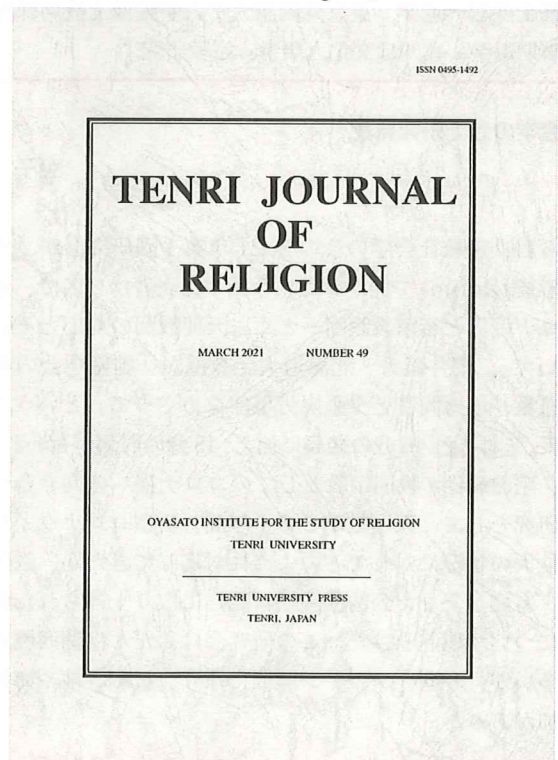
尾上貴行『天理教北米伝道と日系移民—異文化適応とトランスナショナルな視点から見た歴史と展開』(伝道参考シリーズ38)(本体880円)



『おやさと研究所年報』第27号



『Tenri Journal of Religion』No.49



グローバル天理  
第22巻 第5号 (通巻257号)

2021年(令和3年)5月1日発行

© Oyasato Institute for the Study of Religion  
Tenri University

発行者 永尾教昭  
編集発行 天理大学 おやさと研究所  
〒632-8510 奈良県天理市杣之内町1050

TEL 0743-63-9080

FAX 0743-63-7255

URL <https://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/index.html>

E-mail oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

印刷 天理時報社

Printed in Japan